

園芸文化研究所助成研究報告

(プロジェクト研究の部)

19世紀英国における 園芸文化の大衆化の研究

新妻昭夫(人間社会学部人間環境学科)

初年度であり、予備的な調査と議論にとどまった。課題に関連する以下の3つのテーマについて、簡単に報告したい。

1. 労働者階級にとってのガーデニング文化:日本でも注目されてきた「市民農園」に対応する英国の「アロットメント (allotment)」について、基礎的な資料の収集に着手した¹。また18世紀末から19世紀はじめにかけての「工場村」において、経営者による労働者への住宅の提供とともに進められたガーデニングや菜園の奨励についても、基本的な資料の収集に着手した。本プロジェクトと課題が重複する文科省科研費萌芽研究²のワークショップでの穂鷹知美さんの研究発表³によって、ドイツでの「市民農園」の歴史があきらかとなり、菜園やガーデニングの幼児教育における意義(幼稚園が「キンダー・ガーデン(子どもの庭)」と呼ばれる所以など)をはじめ、中流下層以下の階級におけるガーデニング文化の多面的な意義が浮かび上がってきた。

2. ガーデニング文化の女性学的視点からの分析：英国の女性学の専門家シュタイアによるガーデニング文化の研究書⁴の下訳原稿(新妻と山下恵子による)をもとに、翻訳の完成作業に着手した。邦訳刊行について出版社との契約も最終段階にある。

3. 英国ガーデニング文化史の研究：王立園芸協会リンドリー図書室などにおいて、夏休みと春休みに集中的な資料収集を行った。この調査の資金の多くは、上記の科研費萌芽研究⁵による。収集した資料の分析に着手したばかりだが、英国のガーデニング文化の成立史を、おおよそ以下のように描くことができる。

今日の日本でも、いわゆる「イングリッシュ・ガーデン」あるいは「ヴィクトリア朝風ガーデン」が注目されているが、この様式が成立したのは1870年から1914年にかけて、つまりヴィクトリア朝の末期から以降であることが、歴史家アン・ヘルムレイヒによって指摘されている⁶。彼女の著書の表題からあきらかなよう、彼女はこのガーデニング様式の成立を、当時の英国における「ナショナル・アイデンティティー」を求める国民感情に強く関連付けて説明する。

このガーデニング・スタイルの確立に寄与した主要な人物としてヘルムレイヒは、ウィリアム・ロビンソン(William Robinson: 1838-1935)とガートルード・ジキル⁷(Gertrude Jekyll: 1843-1932)を主に取り上げ、この二人の言説と作品を分析する。ロビンソンはもともとは造園家だが、むしろ「園芸ジャーナリスト」といったほうがよく、著書⁸の刊行とともに雑誌⁹の発行によってガーデニング・スタイルの流行に影響をあたえた。とくに「ワイルド・ガーデン」という様式の提唱で知られる。ジキルは女性画家だったが、視力が衰えたためガーデニングに転向し、色彩論を応用した独特の色合いの庭作りで評判となった¹⁰。ジキルの様式を最初に評価したのはロビンソンだが、やがてガーデニング・スタイルについて両者の意見の相違があらわになり、ジキルは発表の場を新たに創刊されたガーデニング雑誌「カントリー・ライフ」(Country Life. 1897-) ¹¹に移していく。

この二人のガーデニング・スタイルの共通点として、それ以前の庭園にくらべ規模が格段に小さく造園費用が安価であること、したがって専門の造園師に依頼せずとも、個人が手造りで庭をもてるという特徴を指摘することができる。そのおかげで、それまで富裕階級の独占物的な位置づけにあった庭が、中流階級の手が届くものとなった。またこのような庭造りの流行のなかで、「コテージ・ガーデン (Cottage Garden)」という英国人一般のあこがれのライフ・スタイル、すなわち英国人の「ナショナル・アイデンティティー」の拠り所が形成されていく。

以上がヘルムレイヒの議論の大雑把な概略だが、これと関連する興味深いことが、王立園芸協会リンドリー図書室での園芸雑誌の調査からあきらかとなった。すなわちロビンソンが発行した「ザ・ガーデン」誌の創刊号の扉にジョン・クラディウス・ラウドン (John Claudius Loudon :1783-1843) の肖像が飾られ、ガーデニング文化の先駆者として称賛されていることである。本誌前号での助成研究報告¹²で注目していたラウドンである。

今日の園芸文化の原型が19世紀の前半に形成されたのではと予想し、ラウドンとリンドリー (John Lindley: 1799-1865) とパクストン (Sir Joseph Paxton: 1802-65) の三人のあいだの確執を取り上げようという考えだった。現時点までの調査によれば、三人の関係はおおよそ次のようだったと考えられる。すなわち、先行するラウドンを手伝っていたリンドリー¹³が、1829年にロンドン大学初代植物学教授に就任する前後にラウドンのもとを去り、王立園芸協会の建て直しに活躍するとともに、パクストンと組んで週間園芸新聞「ガーデナーズ・クロニクル」¹⁴を編集し、園芸文化の大衆化に寄与した。

したがって、ロビンソンがラウドンをガーデニング文化の先駆者と位置づけた理由をあきらかにすれば、昨年度に着手した調査テーマと今年度に着手した調査テーマがひとつの流れとしてつながることになるだろう¹⁵。

(Endnotes)

- 1 Crouch, D. & C. Ward, 1997. *The Allotment: Its Landscape and Culture*. Five Leaves Publications (Nottinjgham). アロットメントの歴史や国際比較だけでなく、労働政権時代の政策、都市再開発や「スクウォッター (Squatter)」など、今日的な問題と関連づけて議論され興味深い。
- 2 科学研究費萌芽研究「都市近郊の里山の保全と活用に関する総合的研究」(代表者：新妻昭夫、課題番号：16651015)。
- 3 穂鷹知美 (2004 年) 『都市と緑——近代ドイツの緑化文化』(山川出版社)。
- 4 Shteir, A. B., 1996. *Cultivating Women, Cultivating Science: Flora's Daughters and Botany in England 1760-1860*. The John Hopkins University Press.
- 5 上記の注 2 参照。
- 6 Helmreich, A., 2002. *The English Garden and National Identity: The Competing Styles of Garden Design, 1870-1914*. Cambridge Univ. Press.
- 7 『ジキル博士とハイド氏』の「ジキル」だが、「ジェキル」と表記したほうが原音に近いかもしれない。
- 8 Robinson, W., 1870. *The Wild Garden or, Our Groves & Shrubberies Made Beautiful*. John Murray (London).; Robinson, W., 1883. *The English Flower Garden*. John Murray (London). ロビンソンの代表作は、いまでもペーパーバックで再版されている。
- 9 *The Garden (1871-1927)*. *Gardening Illustrated (1879-1956)*.
- 10 Jekyll, G., 1899. *Wood and Garden, Notes and Thoughts, Practical and Critical, of a Working Amateur*. Longmans, Green, and Co. (London).; Jekyll, G. 1900. *Home and Garden, Notes and Thoughts, Practical and Critical, of a Worker in Both*. Longmans, Green, and Co. (London).; Jekyll, G., 1904. *Old West Surrey*. Longmans, Green, and Co. (London).; Jekyll, G., 1908. *Colour in the Flower Garden*. Country Life (London). ; Jekyll, G., 1914. *Colour Schemes for the Flower Garden*. Country Life (London). ジキルの代表作は、今日でも再版され入手できる。
- 11 エドワード・ハドソン (Edward Hudson) によって 1897 年に創刊され、今

日もつづいている。ガーデニングの歴史と美学への関心が強く、学問的にも図版的にも上質。ヴィクトリア朝の終わりを告げ、都市で収入を得ながら田園(カントリー・サイド)での生活にあこがれるという当時の英国人の心性を捉え、また鼓舞したとされる。読者層は富裕な中産階級。

12 新妻昭夫(2004年)「19世紀前半における植物学の近代化と女性の困い込み：ラウドン夫妻を事例として」(『園芸文化』(恵泉女学園大学園芸文化研究所報告)、第1号：80-85ページ)。

13 ラウドンの『植物百科』(Loudon, J. C., 1829. Encyclopedia of Plants)は、その大半を「ある著名な植物学者」が執筆したことになっているが、その植物学者とはリンドリーのこと。つまりリンドリーはこれを執筆していたときには無名に近かったが、刊行と同時に植物学教授に抜擢されたと推測できる。

14 Gardener's Chronicle. 創刊号は1841年1月2日号、各号16ページ(三段組で各110行前後。情報満載と表現してまちがいない)で、定価は6ペンス。当時の風刺漫画誌「パンチ」など週刊誌の多くが一冊3ペンスだったので、やや高級誌といえるだろう。

15 最後の「ガーデナーズ・クロニクル」をダーウィンが定期購読し、またいくつかのレター(実質的な論文もある)を投稿していたことは以前から理解していたが、先のロビンソンの「ワイルド・ガーデン」というガーデニング様式が、ダーウィン及びウォーレスの進化理論を応用したものであることが今回の調査で明らかになった。個人的な趣味の問題かもしれないが、この二人を軸に進化論の成立史を研究してきた筆者にとっては、かくべつにうれしい事実である。